Richard Ronald and Allison Alexy (eds.)

Home and Family in Japan: Continuity and Transformation

Routledge, 2010, 304 pp.

本書は，日本人類学ワークショップ（Japan Anthropology Workshop：JAWS）が刊行するシリーズの第15作目にあたる．JAWS は1984年に結成され，オックスフォード大学の人類学者が中心となって運営してきた学会で，日本を研究する人類学研究者の国際組織として，ニュースレターの発行や研究会の開催（１年半ごと）などの活動を行っている．

本書には，2007年にオスロで行われた JAWS 大会で発表された内容を元にした13編が収録されているが，それらは大きく４つのテーマに分類できる．初めの４章は，政府・行政における家族観に関するもので，まず第１章で，これまでの国の政策や制度が家族に与えた影響や家族規範について概観し，続く第２章では，公共広告機構（AC）のキャンペーン等を例に挙げながら，主に行政サイドがもつ家族のイメージと現実とのギャップを明らかにする．第３章は，自民党政権下における家族関連施策の検証である．第４章では，すべての国民に課された戸籍制度を詳細に解説し，それが家族形成に与えた影響を論じている．続く３章はジェンダーをテーマとし，シングルマザー（第５章），サラリーマンや男らしさ（第６章）についての分析と，それらが未婚女性の家族観に与える影響について議論している（第７章）．一方，第８章から第10章では，住宅の構造や住宅取得のパターンがどのように変化してきたか，それらが政府の政策や社会規範の変化とどのように関連しているかといった，いわばハード（住宅）とソフト（家族）の関係がとりあげられている．具体的には，第８章では，住宅取得パターンの戦後の変化の観察を通して，最近の若い世代が従来の住宅取得モデルから外れていく様子を明らかにし，第９章では，社会学的，歴史的，建築的に住宅と家族の変遷を記述する．また，第10章では，東京のホームレス問題に着目し，永住できる住宅がないことが家族の離散をまねくとする．最後の３章では，住宅の空間的な側面から生じる家族関係の諸問題について，ひきこもり（第11章），離婚（第12章），親子間の空間的・距離的なバランス（第13章）といった事象を分析している．

本書は，およそ「イエ」に関わる広範な話題を扱うが，全体的に記述的分析が中心で，定量的分析は少ない．住宅はいわば家族や人の「容れ物」であり，都市における住宅ストックの質と量が人口の構成に与える影響は小さくないはずだが，本書に限らず，両者の定量的関係については研究の余地がまだ多く残されている．例えば本書の第８章では，政府も後押ししてきた持ち家志向のために良質な賃貸住宅がストックされず，それが離家の遅れをまねき，晩婚化や未婚化，少子化につながったという考察があるが，人口問題的興味としては，そこからさらに定量的に踏み込んだ分析がのぞまれるところである．少子高齢化の進展とともに，住宅のミスマッチ問題（例えば，高齢の小世帯が広い家に住み，子どものいる多人数世帯が狭い家に住む，等）も顕在化しており，また，今後進む人口減少は住宅のストックやフローにも影響を及ぼすであろう．ひとり親世帯や単身世帯の増加といった世帯の動向はもとより，2.5世帯住宅やシェアハウス，子育てや介護のための同近居など，家族や住宅をめぐる状況はつねに変化している．本書からは，家族や住宅に関する制度，規範，そして家族・住宅のありようには，複雑な因果関係があることが示唆される．そうした関心に対して，本書はより発展的な分析の足がかりとなるものと期待される．人口問題に直結するものは少ないが，地理的，文化的に，あるいは分野的に，外から眺め，振り返ってみることは，あらたなきづきを得る機会となろう．

（小山泰代）